

酒井抱一の仏画制作

—谷文晁との関わりから—

木下 明日香（神戸大学大学院）

酒井抱一によって制作された仏画は、近年三井記念美術館に寄託され紹介された《観音像》を含め、現在 13 点が確認されている。抱一による仏画作例は、作品数・質ともに軽視できない存在であるが、その研究はあまり進んでいるとは言えない。宗達・光琳の仏画作例数に対し、抱一およびその弟子たちによる仏画作例数の多さは特筆すべきものである。本発表は、酒井抱一の仏画制作についての試論を提示するものである。

抱一の生涯と画風展開は、岡野智子氏の論考ですでに検討され、明らかにされているが、その対象は、主に浮世絵と花鳥画に絞られており、仏画については論じられていない。仏画制作については、玉蟲敏子氏が出家を契機に浮世絵制作から仏画制作へと転換を図ったと論じられているものの、個々の仏画の表現方法の検討や制作年代の推定などは行われていない。

抱一の仏画制作に関わったと考えられるのは谷文晁である。抱一の描いた《妙音天像》、《日課観音像》（諸家分蔵）、先述の《観音像》と共通の図様をもつ図が、文晁作品および文晁の編じた『本朝画纂』に見受けられる。これらの作品のうち、2 点は原本となる古画の存在が指摘されており、《観音図》についても、共通の古画が存在した可能性が示唆されている。その他にも《洋犬図絵馬》（西新井大師総持寺）、《藤・蓮・楓図》（MOA美術館）の原本と推察される縮図が、『本朝画纂』に確認できる。他の抱一の仏画において、原本の特定できない作品にも、似た図様をもつ作品が確認できるものが多く、抱一が独自に考案し、制作したとは考えがたいことから、発表者は、仏画を制作するにあたって、古画を参考に作画を行い、その制作源としたのではないかとの推測を行った。

抱一は、南蘋派など同時代の多様な画派の学習につとめたが、これらの検討から、古画学習も積極的に行っていたことが判明する。そしてその古画学習には、当時流行していた江戸の書画会の先駆者である文晁の影響が大きいと考えられる。本発表では、文晁と抱一の影響関係を明らかにすることで、仏画群の制作年代を推定し、また、抱一が描いた仏画の顔貌表現等の比較・検討により、その制作順序および特徴を考察し、画風展開における位置付けを試みたい。